

## 【編集後記】

▼真宗大谷派の「同朋会の運動」とかかわりはじめて五年目になる。調査をはじめからこのかた真宗と向きあって伝統仏教々団の問題を考へつづけてきたわけである。

六九年の暮この運動を推進してきた直道会は宗議会選挙で破れ、一月末の臨宗で訓覇信雄師は総長の座を降りた。しかしこのまま「同朋の会運動」が教団変革の軌道を突っ走ることではできなかったであろう。長い間には旧い教団の体質に浸蝕されて、信仰運動の内実を失ない、老朽化した教団の防衛的な運動に変質させられてしまうことになりかねなかった。それが「大谷家」によって再度、自己純粹化の機会を与えられたようなものである。

▼仕事の関係で「同朋会」の、前身である「真人社」運動の資料を読む機会を与えられたが、「真人」誌に掲載されている論文やエッセイは、今も珠玉の如く輝きを失なっていない。その問題意識の新鮮さに驚かぬ人はあるまい。清沢満之が浩々洞をつくって信仰運動をはじめから真人社へ至る過程は平坦な道のりではなかった。一人一

人の信仰を求める道念がそれを支えてきたのである。翼賛体制下の教団のなかにあって、戦争の暗い谷間を孤独な信仰者として生きのびて、昭和二十三年五月、「真人」社の宣言が発表された。

▼しかし浩々洞が挫折していった経緯についてはいまだに研究がなされていない。大正デモクラシーの勃興とともに、その信仰運動が崩壊の過程を歩んだということは、日本の近代思想史における問題点を象徴しているのではなからうか。△大正デモクラシーのどこが悪いんですか▽とってひらきなおる若い知識人がいまだに私の周辺にもいるが、そのあたりから日本近代思想における人間不在が形成されていったのである。歴史社会的現実や大衆の生活現実から遊離した文化が、市民権を主張しはじめたのである。戦後民主主義の空洞化が指弾されはじめているが、その根は大正デモクラシーから出発したのである。

▼「教学とは時代の苦悩を宗教的実存に於て荷負することである。時代の苦悩」というところに教学の生命がある。(中略)今日の人類の歴史の苦悩というものを自己の責任

に於て自己否定的に荷負するところに教学の生命があり生ける教団の展望がある。」(真人・14号社説「教団のいのり」より)

昭和二四年、すでに真人社運動を推進していた人たちはこのような到達点を示している。ここに示された到達点こそ現代仏教の共有の資産となさねばならないであろう。

▼「所報」4号の内容が具体的に示しているように、現宗研はアカデミズムの業績などを目標とした研究機関ではない。宗教としての仏教とその社会的形式である教団の問題を、より具体的に追求し、現実的展望を切り拓くことを目指している。具体的にそれを示したのが立正大学問題をあつつかたレポートである。大学問題に関する情報をもたない教団人のために特別号を発刊することも考えられる。大学問題は最初のきっかけではないが、宗門の本質にかかわる緊急の課題があれば、常にそれととり組むだけの準備が現宗研には要請されているものと思う。やがてそれに応えうる態勢をととのえていきたい。宗門有識者によってより強固に現宗研が支えられることを懇願して筆を置く。

(丸山照雄記)